



## 教授の呟き

### 第72回

# 明日のために、次の周期を考える

東京海洋大学教授  
苦瀬博仁

#### ●●● 新しい暦を手にするころ

年末が近づくと、新しいカレンダーを頂く機会が増える。カレンダーのデザインには会社の趣向が表れるので、封を開けることも楽しみになっている。最近ではシンプルなのが好まれているようだが、昔は大安などの六曜（ろくよう）が表示されているカレンダーも多かった。

六曜とは、先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の6つである。「日の吉凶占い」であるが、冠婚葬祭の日取り以外には縁が薄くなっている。むしろ日常生活は、日曜日から土曜日の七曜にしたがい1週間単位で生活している。

物流の世界でも、1週間は大きな意味がある。休み明けの月曜日や週末には、店舗への配送が集中するように、週を単位に波動性が認められる。

#### ●●● 日と週と月

週よりも長いのは、月である。月給というように給与も月単位である。月によって日数は28日、30日、31日と変わるから、週の途中で月が変わることに抵抗感はない。しかし、うるう年でなければ2月と3月は日にちと曜日が同じになるので、うっかり2月と3月を間違えてしまうことがある。月の日数が7で割り切れないことが、実は便利なのだ。

日にちの末尾が5か0の日である

五十日（ごとおび）は、締め日（しめび：伝票の締め切りの日）であることも多い。このため、締め日間に合わせようと物流が増えるために、ラジオの交通情報でも、「今日は五十日なので道路が混んでいます」など解説することになる。

#### ●●● 1年と60年

月よりも長いのは、年である。企業も学校も、そして年齢も1年単位で動いている。

干支（えと）は、正確には十干十二支のことだそう。

十干は甲（きのえ）・乙（きのと）・丙（ひのえ）・丁（ひのと）・戊（つちのえ）・己（つちのと）・庚（かのえ）・辛（かのと）・壬（みずのえ）・癸（みずのと）の10からなり、十二支は子（ね）・丑（うし）・寅（とら）・卯（う）・辰（たつ）・巳（み）・午（うま）・未（ひつじ）・申（さる）・酉（とり）・戌（いぬ）・亥（い）の12からなっていて、あわせて干支と呼ぶ。

60通り組み合わせがあるので、めぐり巡って61番目は元に戻る。数え年で61才になると、生まれた年と同じ干支になるから「還暦」である。この年齢の前後で定年になる人も多いから、60年というサイクルも身近である。

#### ●●● 30年か40年か50年か、800年か

会社のサイクルでは、ひところ「企業30年寿命説」がはやった。どん

# 技術革新サイクル50年 春夏秋冬 景気循環 企業30年寿命説 1週間



な企業も30年程度たつと、変化をしなければ発展が続かないということだろう。ちょうど還暦の半分にあたるのは、偶然の一致だろうか。

40年説もある。歴史作家の半藤一利氏によれば「日本の『滅びの周期』は40年」だそうである。江戸末期の開国(1965年)から日露戦争(1905年)まで40年だったが、第1の滅びの周期は日露戦争(1905年)から太平洋戦争(1945年)、第2は占領終了後(1951年)からバブル崩壊(1991年)まで。となると、第3は1991年から約40年後の2030年だという。この年には、高齢者が人口全体の3分の1を占める年でもある。当たって欲しくない周期であるが、対処も怠らないようにしたい。(1)

景気循環であれば、有名な「コンドラチェフの波」がある。技術革新に同調して、約50年の周期で景気が循環しているという。産業革命や鉄道建設、そして自動車産業などがあたるらしい。

知っているなかで、もっとも長い波は「世界文明の波動周期」である。「東と西での文明の主役は800年ごとに交代し、交代の時期に100年間

の転換期が存在する」とのこと。ちょうど2000年をはさむ±50年が、西洋から東洋への転換期だとしているから、現在は転換期の真っ最中になる。(2)

## ●●● 来年はどんな年？

さて来年は、己丑(つちのとうし)ということ、十二支でいえば丑年(うしどし)である。つい最近の金融危機以後、景気回復も牛歩の歩みだろうか。

40年説でいけば、2009年は滅びの中間であるから、峠に差しかかっている時期だとすれば、少し気を引き締めなければならない。一方で世

界文明の800年周期説によれば、アジア中心の時代が本格的に始まることから、わが国の役割も高まるということなのだろうか。

輪廻(りんね)転生といえれば大きさかも知れないが、日常生活も経済動向も、大きな波・小さな波や、長い循環・短い循環を繰り返しているようだ。1年という周期が終わるとき、さまざまな波動や循環を思い起こしながら、次の1年を考えて見ることも良いと思うのである。 ☒

(1) 半藤一利・江坂彰：「日本人は、なぜ同じ失敗を繰り返すのか—撤退戦の研究—」(p238～240)、知恵の森文庫、光文社、2006年

(2) 村山節：「文明の研究—興亡とその法則—」、?六法出版社、1975年

**Profile**

東京海洋大学 海洋工学部  
流通情報工学科 教授

**苦瀬博仁**

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により東京海洋大学、副学部長、評議員、流通情報工学科長を経て現職。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授(併任)。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」(税務経理協会)、「都市交通—都市交通計画・都市物流計画」(丸善)、「マニラ・エンジョイ・トラブル」(論創社)、「明日の都市交通政策」(成文堂)、「都市の物流マネジメント」(勤草書房) <http://www2.kaiyodai.ac.jp/~kuse/>